

関係各位

財団法人 社会経済生産性本部  
社団法人 日本経済青年協議会

## 平成20年度新入社員（3,833人）の 「働くことの意識」調査結果（第40回）

財団法人社会経済生産性本部（理事長 谷口恒明）と社団法人日本経済青年協議会（代表幹事 田所 稔）は、平成20年度新入社員を対象に実施した「働くことの意識」調査結果をとりまとめた。この新入社員の意識調査は、昭和44年度に実施して以来40回目を数え、この種の調査ではわが国で最も歴史のあるものである。

### 平成20年度新入社員「働くことの意識」調査の主要結果

●**就職活動で利用された情報源**では、「インターネットの企業ホームページ」が初めて全体で1位（85.7%）となった。大卒採用以外にもインターネットの利用が広がった。なお第2位は昨年1位の会社説明会（83.3%）。<5ページ参照>

●バブル期を上回る採用数に達するなど「売り手市場」を反映してか、「思っていたよりも満足のいく就職ができた」と答えたものは、全体で82.4%であった。また「二つ以上の会社から内定をもらった」に全体の46.5%、四年制大卒の62.2%が「はい」と回答している。<9ページ参照>

●**就職先の企業を選ぶ基準**では、最も多かった回答は「自分の能力、個性が活かせるから」で、全体の28.3%であった。以下「仕事がおもしろいから」（23.8%）、「技術が覚えられるから」（13.6%）など、個人の能力、技能ないし興味に関連する項目が上位を占めた。反面、勤務先の企業に関連する項目は低い水準にとどまった。調査開始当初（昭和46年～48年）1位だった「会社の将来性」は（8.7%）、「一流会社だから」（5.0%）、「経営者に魅力を感じて」（4.3%）、「福利厚生施設が充実しているから」（1.9%）などとなっている。若者の意識が「就社」より「就職」に変化していると思われる。<5、6ページ参照>

●**仕事中心か生活中心か**では、「仕事と生活の両立」という回答が大多数（79.7%）を占め、「仕事中心」（9.5%）、「生活中心」（10.7%）、という回答を大きく上回る。<3、4ページ参照>

●**デートか残業か——プライベートより仕事を優先が多数派**  
「デートをやめて仕事をする」（81.4%）、「ことわってデートをする」（18.1%）と、プライベートな生活よりも仕事を優先する意向が窺える。このうち、「デートをやめて仕事をする」という回答は男性77.6%に対して、女性87.1%と女性のほうが10ポイント近く上回っている。<8ページ参照>

### 【本件に関するお問い合わせ先】

財団法人 社会経済生産性本部 [社会労働部：高野 tel. 03-3467-7252 fax. 03-3467-7254]

社団法人 日本経済青年協議会 [担当：片寄、畔津 tel. 03-3469-2381 fax. 03-3481-5726]

## 平成 20 年度新入社員「働くことの意識」調査結果の概要

### I. 本調査の沿革

本調査は昭和 44 年(1969 年)以来、毎年一回、春の新入社員の入社時期に継続的に実施され今回で第 40 回となる。新入社員を対象とするものとしてはもちろん、就労意識をテーマとする調査として他に例を見ない長期にわたる継続的な調査である。これまで 40 年にわたり、ほぼ同一の質問項目で実施されており、非常に興味深いデータの経年変化が蓄積されてきた。また、近年の社会経済の変化や若い世代の価値観の変化を踏まえ、平成 13(2001 年)年度以降いくつかの質問事項の入れ替えと新たな質問事項を追加している。

### II. 調査の概要

- (1) 調査期間 : 平成 20 年 3 月 5 日から同年 4 月 30 日
- (2) 調査対象 : 平成 20 年度新社会人研修村(国立オリンピック記念青少年総合センターにて開設)に参加した企業の新入社員
- (3) 調査方法 : 同研修村入所の際に各企業担当者を通じて調査票を配布し、その場で調査対象者に回答してもらった。
- (4) 有効回収数 : 3,833 件
- (5) 回答者プロフィール :

**回答者プロフィールの表**

性別	最終学歴	業種	会社規模
男性	60.0	普通高等学校	11.3
女性	39.9	職業高等学校	3.2
不明	0.1	工業専門学校	2.4
		短期大学	4.3
		4 年制大学	58.7
		大学院	9.4
16 歳以下	0.1	専修・専門学校	8.0
17 歳	0.4	各種学校	0.9
18 歳	15.1	その他	1.3
19 歳	0.9	不明	0.5
20 歳	9.8		
21 歳	2.0		
22 歳	41.6		
23 歳	13.6		
24 歳	9.2		
25 歳以上	7.0		
不明	0.1		

\* 回答数値は小数点第 2 位を四捨五入している

### Ⅲ. 本年度新入社員の特徴

#### 1. ポスト氷河期の意識が明瞭に

##### ——「思っていたよりも満足」が8割、「複数内定」四大卒の6割

①本年入社の新入社員は就職状況の大きな転機に遭遇した。2000年前後を中心とする就職氷河期は、平成不況と、人口が多い第二次ベビーブーム世代の就職適齢期が重なったため激烈を極め、フリーターやニートの増加といった社会現象の原因ともなった。その後、景気の回復とともに新卒採用は徐々に増加したが、学生の間ではそのトレンドが本物かどうか懐疑的な見かたをするのが一般的だった。しかし、昨年の採用がかなり多かったため、一気に雰囲気が変わり、今年の就職活動は終始楽勝ムードだった。マスメディアでは「超売り手市場」「バブル期を超える空前の採用数」といった言葉も使われた。2008年入社組は、本格的にポスト氷河期に入った新入社員として記憶されるだろう。

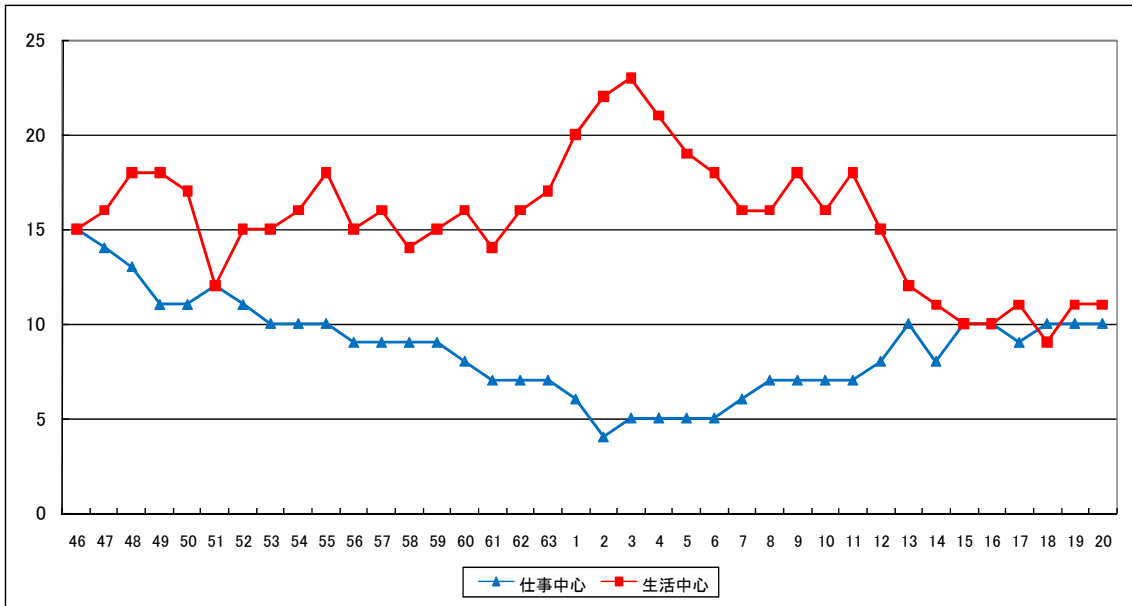
おのずと新入社員たちの意識も変化する。本調査に先行して3月に社会経済生産性本部では恒例の「今年の新入社員のタイプ」を「カーリング型」と発表した。これは企業の採用担当者などの印象をもとに考案されるのだが、ポスト氷河期の売り手市場を背景に、スムーズに内定に至った新入社員が多かったことを念頭においたものだ。「新バブル入社組の出現」という指摘もされ、本調査でも「思っていたよりも満足のいく就職ができた」という回答が全体の82.4%にも達した(Q33-1)。また「複数の内定」を得た者が全体の46.5%、四年制大卒の62.2%あった。

②採用状況が売り手市場であったか、買い手市場であったかで微妙に数値が変化する項目がある。これからの社会人生活を「仕事中心」にするか「(私)生活中心」にするかという質問(Q6)で、常に「両立」という回答が多数を占めるものの、「仕事中心」という回答はバブル期の4%をボトムに近年10%前後に上昇していた。それが一昨年は10%を割り9.7%、昨年9.6%、今年9.5%となった。反対に「生活中心」という回答はバブル期の23%をピークに近年9%台に低下していたが、昨年は10.6%、今年10.7%となっている。来年以降の推移にもよるが「仕事中心」志向の上げ止まり、「(私)生活中心」志向の下げ止まりと見ることもできる。

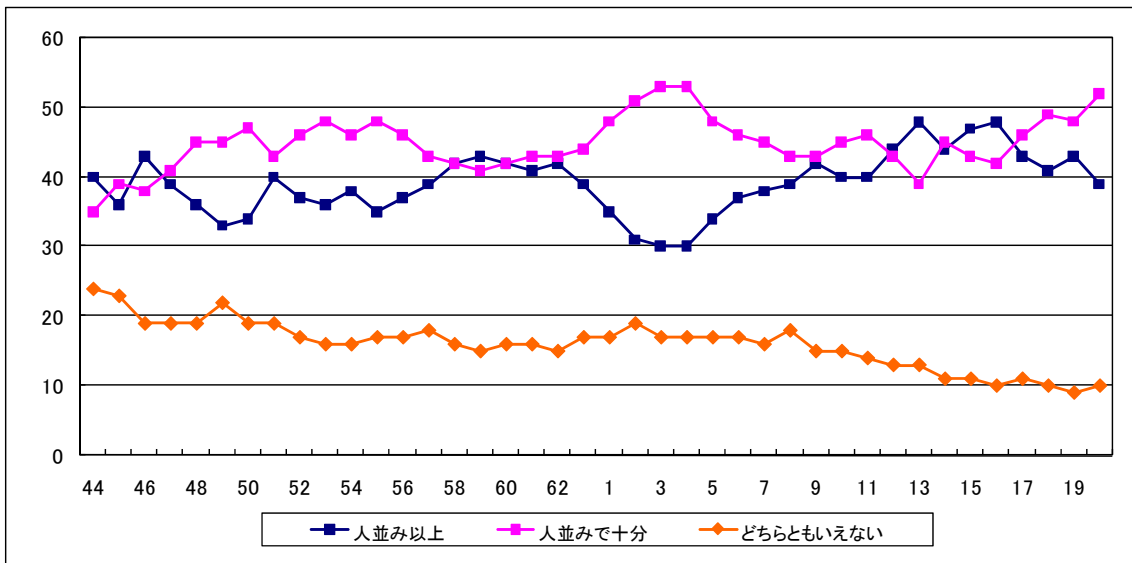
「人並み以上に働きたいか」(Q8)では「人並み以上」が42.8%から38.5%に減少し、「人並みで十分」が47.9%から51.9%に増加している。中期的に見ても、超氷河期と言われた平成13年の「人並み以上」48.2%、「人並みで十分」38.7%から10%近くの変化となっており、売り手市場を背景に、バブル期に見られたような「お気楽志向」が浮上しつつあるのかも知れない。

③超売り手市場の中の楽勝ムードの就職だったが、社会の先行きについてはむしろ暗いイメージをもつものが増加している。「世の中は、いろいろな面で今よりもよくなっていくだろう」(Q30-18)が昨年の48.5%から42.9%に減少し、「世の中は、いろいろな面で、今よりも昔のほうがよかった」(Q30-19)が昨年の44.1%から48.1%に増加している。昨秋あたりからのサブプライムローン問題、原油価格の高騰、インフレ懸念といった現象を受けて、これからの会社員生活が必ずしも順調とはいかない可能性を懸念しているとの見方もできよう。

仕事中心／生活中心の経年変化グラフ



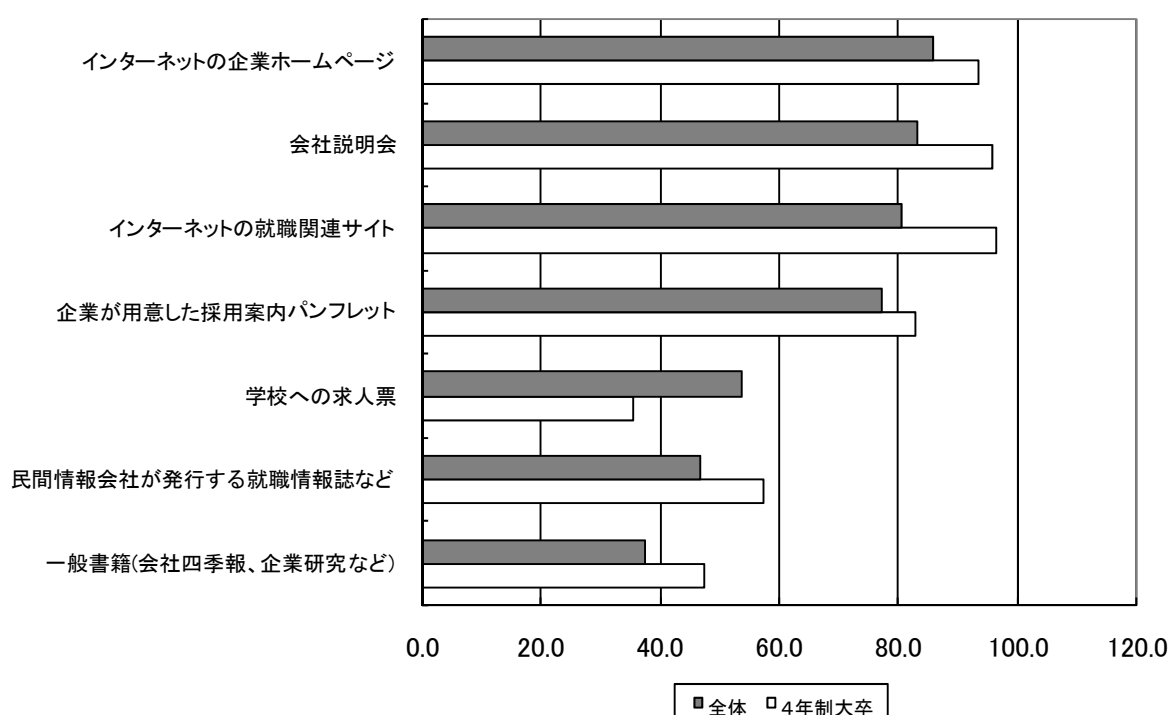
人並み／人並み以上の経年変化グラフ



## 2. 就職活動の情報源——「企業ホームページ」が初めて全体で1位に

就職先を選択するにあたって利用した情報源（Q5）は、利用度の高い順に「インターネットの企業ホームページ」（85.7%）、「会社説明会」（83.3%）、「インターネットの就職関連サイト」（80.6%）、「企業が用意した採用案内パンフレット」（77.3%）、「学校への求人票」（53.6%）、「民間情報会社が発行する就職情報誌など」（46.6%）、「一般書籍（会社四季報、企業研究など）」（37.4%）となる。会社説明会、パンフレットなどが今も上位にランクされるが、今回初めて「インターネットの企業ホームページ」が全体で1位となった。四年制大学卒は、企業ホームページについては93.6%が、就職関連サイトについては96.4%が利用しており、四年制大卒の就職にあたっては特にインターネット情報の重要性が非常に高くなっている。

就職活動の情報源（Q. 5）



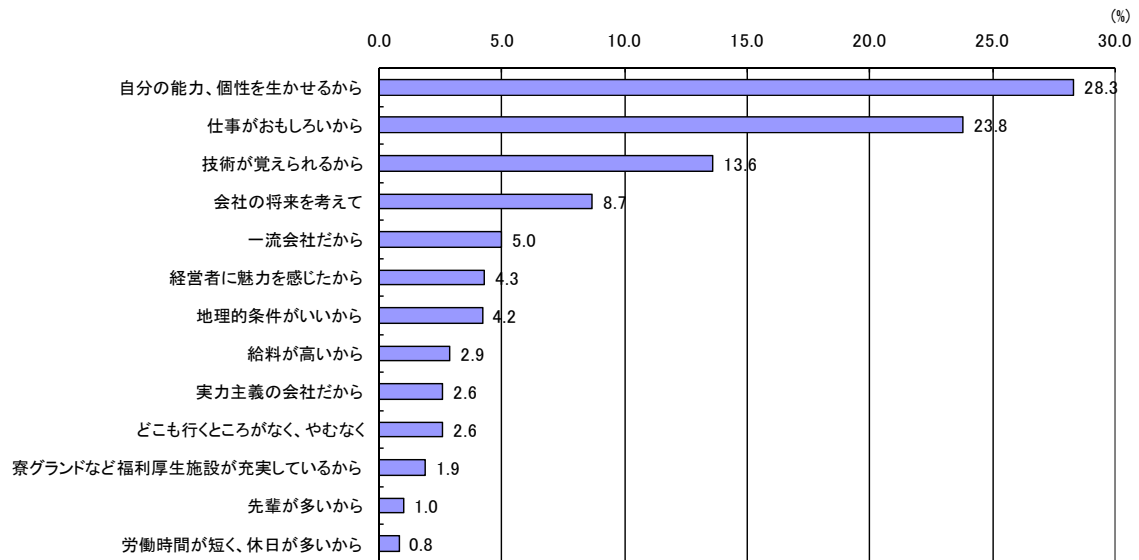
## 3. 会社の選択基準——「就社」から「就職」へ 能力・個性を重視した会社選び

①「会社を選ぶとき、あなたはどのような要因をもっとも重視しましたか」（Q1）という質問に対して、最も多かった回答は「自分の能力、個性が活かせるから」で、全体の28.3%であった。以下「仕事がおもしろいから」（23.8%）、「技術が覚えられるから」（13.6%）が上位を占めた。このような個人の能力、技能ないし興味に関連する項目に比べて、勤務先の企業に関連する項目、「一流会社だから」（5.0%）、「経営者に魅力を感じて」（4.3%）、「福利厚生施設が充実しているから」（1.9%）などとなっている。若者の意識が「就社」より「就職」に変化していると思われる。

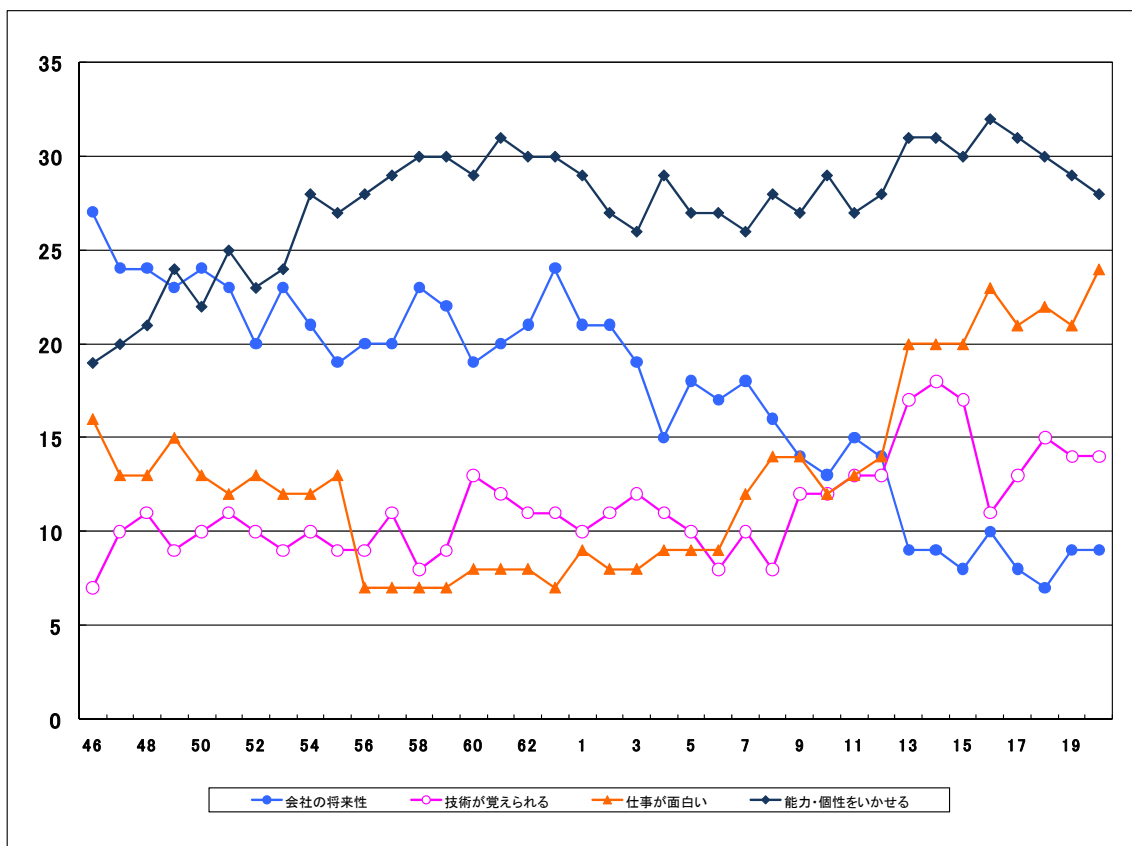
②会社選択の要因（Q1）で興味深いのは、昭和46年度には27%でトップに挙げられていた「会

社の将来性」が、一ケタ台（8.7%）にまで落ち込んでいるということである（ここ6年間の推移は8%→10%→8%→7%→9%→9%）。代わりに「自分の個性・能力が活かせる」「仕事がおもしろい」「技術が覚えられる」といった項目が上位を占め、まさに“寄らば大樹”的な思考が廃れ、個々人の技能や能力が問われる、成果主義的なシステムに対応した意識に変化したことを物語っている。

### 会社の選択理由（Q. 1）



### 会社の選択理由（経年変化）（Q. 1）



#### 4. 就労意識——“感謝される仕事がしたい”が2位に

就労意識について13の質問文をあげ、「そう思う」から「そう思わない」まで四段階で聞いてみた(Q11)ところ、肯定的な回答(「そう思う」と「ややそう思う」の合計)の比率は以下のよ  
うな順になった。

##### 就労意識のランキング(Q. 11)

各項目の( )内の数字は調査項目の質問番号

- 1位 (7) 仕事を通じて人間関係を広げていきたい (95.9%)
- 2位 (13) 社会や人から感謝される仕事がしたい (94.5%)
- 3位 (3) どこでも通用する専門技能を身につけたい (92.6%)
- 4位 (12) これからの時代は終身雇用ではないので、会社に甘える生活はできない (82.8%)
- 5位 (9) 高い役職につくために、少々の苦勞はしても頑張る (80.5%)
- 6位 (1) 仕事を生きがいとしたい (73.8%)
- 7位 (6) 仕事をしていくうえで人間関係に不安を感じる (65.1%)
- 8位 (2) 面白い仕事であれば、収入が少なくても構わない (56.3%)
- 9位 (4) いずれリストラされるのではないかと不安だ (39.8%)
- 10位 (11) 職場の上司、同僚が残業していても、自分の仕事が終わったら帰る (34.0%)
- 11位 (8) 仕事はお金を稼ぐための手段であって、面白いものではない (30.3%)
- 12位 (5) いずれ会社が倒産したり破綻したりするのではないかと不安だ (22.1%)
- 13位 (10) 職場の同僚、上司、部下などとは勤務時間以外はつきあいたくない (20.4%)

総じてポジティブで積極的な項目が上位を占める傾向があり、反対に、ネガティブで消極的な項目が下位を占める。職場の人間関係にドライな若い世代が多いというイメージがあるが、この結果を見る限り、新入社員たちは職場の人間関係に大きな期待をもっている。反面、「仕事をしていくうえで人間関係に不安を感じる」も65.1%あり、職場の人間関係が新入社員の大きな関心事であることがわかる。

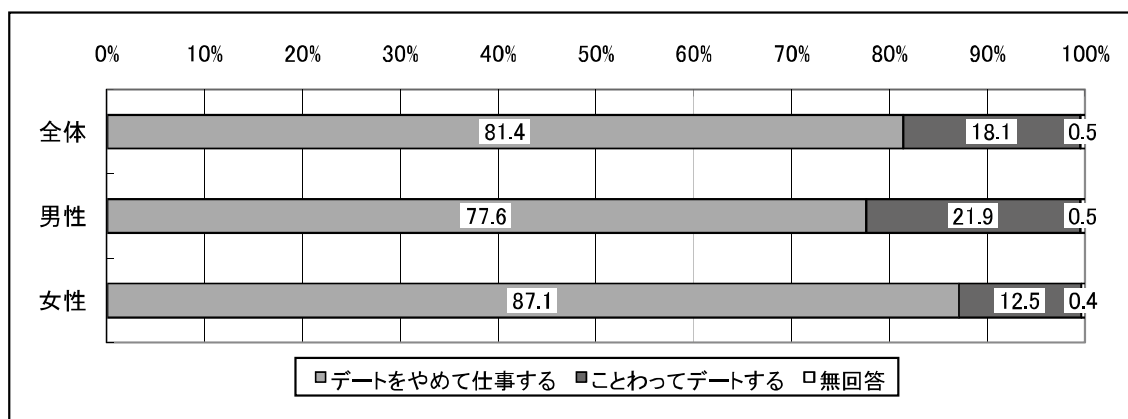
また、ここでも専門技能への関心が見られ、これからの職業生活において、個人の専門技能をよりどころとしていきたいとする意向が伺える。

昨年との比較では、大きな変化は見られないが、昨年2位の「どこでも通用する専門技能を身につけたい」がやや減少し(93.1%→92.6%)、3位の「社会や人から感謝される仕事がしたい」がやや増加し(92.9%→94.5%)、2位と3位が入れ替わった。

## 5. デートか残業か——プライベートより仕事を優先が多数派

「デートの約束があった時、残業を命じられたら、あなたはどうしますか」(Q15)という質問に対しては、「デートをやめて仕事をする」が81.4%(前年81.7%)、「ことわってデートをする」が18.1%(前年18.0%)と、プライベートな生活よりも仕事を優先する意向が伺える。このうち、「デートをやめて仕事をする」という回答は男性77.6%(前年79.2%)に対して、女性87.1%(前年86.1%)と女性のほうが10ポイント近く上回っている。この傾向は近年ほぼ変わらず推移している。

デートと残業 (Q. 15)



## 6. 生活価値観——“いい時代に生まれた”が浸透

一般的な生活価値観について16の質問をした(Q30)。四段階のうち「そう思う」「ややそう思う」の合計%で順位づけると、おおむね、積極性を示す項目が上位を占め、消極性を示す項目が下位を占めた。1位となったのは「(14)人間関係では、先輩と後輩など上下のけじめをつけるのは大切なことだ」(90.6%)で、以下、2位が「(22)将来の幸福のために、今は我慢が必要だ」(85.0%)、3位が「(13)明るい気持ちで積極的に行動すれば、たいていのことは達成できる」(84.6%)であった。

「人間関係では上下関係のけじめが大切」が1位となったが、別項目(Q11)にも「仕事を通じて人間関係を広げていきたい」(95.9%)、「仕事をしていくうえで人間関係に不安を感じる」(65.1%)といった結果があり、新入社員にとって職場の人間関係が微妙な問題として意識されていることがうかがえる。

「自分はいいい時代に生まれたと思う」は平成18年に前年の74%から81%に増加し、今年も81.5%と同水準で推移した。採用状況の好転による変化と思われる。



## 重視する生活価値観（Q. 30）

各項目の（ ）内の数字は調査項目の質問番号

- 1位（14）人間関係では、先輩と後輩など上下のけじめをつけるのは大切なことだ（90.6%）
- 2位（22）将来の幸福のために、今は我慢が必要だ（85.0%）
- 3位（13）明るい気持ちで積極的に行動すれば、たいていのことは達成できる（84.6%）
- 4位（23）他人にどう思われようとも、自分らしく生きたい（83.2%）
- 5位（20）自分はいい時代に生まれたと思う（81.5%）
- 6位（12）すこし無理だと思われるくらいの目標をたてた方ががんばれる（74.9%）
- 7位（17）企業は経済的な利益よりも、環境保全を優先するべきだ（68.5%）
- 8位（16）あまり収入がよくななくても、やり甲斐のある仕事がしたい（65.3%）
- 9位（21）冒険をして大きな失敗をするよりも、堅実な生き方をするほうがいい（58.5%）
- 10位（15）たとえ経済的には恵まれなくても、気ままに楽しく暮らすほうがいい（58.3%）
- 11位（10）世の中、なにはともあれ目立ったほうが得だ（50.6%）
- 12位（9）自分と意見のあわない人とは、あまりつきあいたくない（48.1%）
- 13位（19）世の中は、いろいろな面で、今よりも昔のほうがよかった（48.1%）
- 14位（11）リーダーになって苦労するよりは、人にしがっている方が気楽でいい（47.5%）
- 15位（18）世の中は、いろいろな面で今よりもよくなっていくだろう（42.9%）
- 16位（8）周囲の人と違うことはあまりしたくない（36.2%）

## 7. 約8割が「思っていたより満足のいく就職」

2003年から、継続調査の項目に加え、その年に関心を集めた話題などについて、その年限りの質問項目を設定している。今年は、「超」売り手市場といわれたことから「就職活動結果への満足度」（昨年も設定した質問項目）、「複数内定の経験率」、さらに流行語となった「空気を読む」という言葉に関連した質問をとりあげた。

まず「思っていたよりも満足のいく就職ができた」（Q33-1）かどうかを尋ねると、「はい」と回答したのは全体の82.4%に達し、昨年の81.9%をわずかに上回った。男女別では男性81.8%、女性83.4%とやや女性優位、学歴では、「大学院卒」（89.4%）、「短期大学卒」（87.3%）が高かった。また「複数内定の経験率」（Q33-2）は、全体の46.5%が「はい」と回答し、「いいえ」（52.8%）を若干下回った。男女別では「はい」が男性48.1%、女性44.0%とやや男性優位、学歴では「四年制大学卒」が62.2%と突出しており、四年制大卒の採用が活発だったことがうかがえる。

また「周囲の人に対して「空気を読め！」と思うことがありますか」（Q33-3）を聞いたところ、全体の84.2%が「はい」と回答しており、大多数がこのような経験をもっている。これを男女別に見ると、男性84.6%、女性83.8%とほとんど差がない。

## 参考. 本調査に関連する出版物について

本調査を素材として二つの出版物が上梓されている。あわせて参照いただければ幸甚である。

森清／夏目孝吉／斎藤幸江／岩間夏樹著

『新社会人白書——採用・就職事情最前線』生産性労働情報センター

岩間夏樹著 『新卒ゼロ社会——増殖する「擬態社員」』角川新書